

とうえい木の駅実行委員会（愛知県東栄町）

素人パワーで、まじまじでまじる！

行政主導から住民主導へ

「どうしても行政主導ではダメかい」「はい、大抵だめですねえ」「そうかい。予算もつけて議会にあげちまつたけど、よしわかっただ！」……。

2012年2月、愛知県新城市での「木の駅説明会」終了直後、隣の東栄町からお忍びで参加していた尾林克時町長が駆け寄ってきたのやりとり。ここから「とうえい木の駅」は始まった。

東栄町は人口3700人で森林率91%、過疎と少子高齢化に悩む愛知県東端の静岡県境の町。町長へ木の駅プロジェクトを提案したのは工藤和美さん。「チェーンソーアートの東栄町」を世に出し、

毎年5月に開催し今年も1万5000人を集めるチェーンソーアート大会の実行委員長でもある。

町長の切り替えは早かった。「それなら住民主導で」と、ふるさと財団の新・地域再生マネージヤ事業の活用を決めた。張本人の工藤さんは、森林組合や商工会はじめ町のキーパーソンたちに声をかけ準備を進めた。6月には実行委員会を立ち上げそのまま委員長に推された。

素人集団も真っ先に賛同

名前は「とうえい木の駅」、地域通貨名は「オニ券」、1枚500円で単位は「スター」と、実行委員会では一つ一つ賑やかに決まっていく。「オニ」は東栄町のシ

ンボルである「花祭り」の鬼から、スターは「日本一星のきれいな町」から……と、地域の誇りが木の駅に散りばめられていく。この過程で当初懐疑的だった商工会が

変わった。商店向けの説明会を開き、個別に勧誘し、2次流通促進のための会計処理マニュアルを作成し、オニ券のデザインを引き受け、商工会事務所に換金のための木の駅ポストまで設置した。結果、登録店舗は40を超えた。山もお店も一丸となって動き出した。

キックオフは10月8日。開会式をお祭りにしよう、和太鼓集団「志多ら」が友情出演してくれた。若者が太鼓を打ち踊る中、30数台の軽トラが丸太を満載して並んだ。「志多ら」は24年前に東栄町に移

り住み、東蘭目小学校跡を拠点に世界を舞台に活躍している。3年前からはその活動と地域づくりを支援するNPO法人「てほへ」が

組織され、木の駅プロジェクトにも真っ先に賛同した。大阪と新潟から移住した西岡幸一さん、星野克之さんらが中心になって、素人集団で古民家再生、間伐材の家づくりや丸太を木の駅に出荷するイベントまで開催した。

木曜日、木の駅の日

「オニ券で飲む晩酌はうまいぞ」。佐々木経人さんが笑う。5年前に地区の仲間10数名を集めて「古戸推進会」を立ち上げた。地区の荒れた山林をなんとかせにゃならんと動き始めた矢先に、「あいち森



▲木の駅開会式での「志多ら」の太鼓と踊り



▲とうえい木の駅実行委員長の工藤和美さん

と緑づくり税」の森林整備事業も始まり連携した。団地化にあたってまず地区の山林所有者一人一人から計1000筆の合意を取り付け、境界立会・測量そして間伐までを会で取り組んできた。そこから発生する林地残材を、毎週木曜

◀町内にたなびくのぼり



▲「てほへ」の間伐材搬出イベント

日に会員みんなで木の駅に出荷する。佐々木さんは言う。「いいことだけど誰かがやってくれるだろうではあかん。地域のために本気でやるのが一番大事」。10〜12月の第1期が終わって、74tが集まった。誰もがオニ券長者は古戸推進会だと思っていた。ところが蓋を開けてみると僅差で「てほへ」の素人集団が出荷1位だった。本人たちもびっくり。度

重なる研修会とイベントの人海戦術で素人の底力を見せつけた。

### 山のお見合い

とうえい木の駅実行委員会は優しい。山を持って余す高輪山主と、山を持たないが木の駅に参加したいイターナーをどう繋げるかに心を砕き、「山のお見合い」制度を作った。実行委員会が山主とイターナーの仲人となり、お見合いの世話を焼く。さらに森林組合労務班向けに「宵荷よいね」制度も作った。昔のように帰りがけに残材を持ち帰り、木の駅に出荷する。そのま

▼古戸推進会の作業の様子



までは勝手に持ち帰ったと誤解されるので、帽子やステッカーで東栄町公認のサインとするなど工夫が始まっている。

▲第1期オニ券長者、「てほへ」のこうちゃんとおぼしー

「みんなの顔つきがどんどん変わっていった。行政主導では絶対こうはできなかつたですね」。町役場経済課の加藤補佐がつぶやいた。行政主導を未然でとどまり、住民自治の木の駅が始まって1年、第3期目に入った。プロも素人もよそ者も、一緒になつて思いやりの連鎖が広がる。